家に伝わる財産も、又これと云う他人に出来ぬ格別の秘伝とてもあるのでなくて、同じ道に三代を通じて携わる事は当代ではそうざらになくなった様だ。

中何々代を継ぐ云々を看板にする人達もあるが、特別の條件が付随して居るし、それ等が実質的には養子であったり、その他名目のみが受け継がれたものも少なくない。

わが家の刀を握る三代は正真正銘の三代を継いだがその間の百年日本の大変革の時機に亘って居るので、世間並の変り方に影響はあったとしても、相も変らずの面も相当にあるのは、血筋と云うべし。

祖父直七の性格はいわば放浪癖が若年よりあった様だ。

僕が幼時より度々父から聞かされた話だけれども、幕末の何年頃か十七、八才の頃、彦根の生家を飛び出して居たらしい。

近代日本の暁とも云うべき鳥羽伏見の戦を暢気に見物して居た所を官軍につかまり、嫌応なしに軍夫としてこき使われる破目におちた。

さんざん働かされて放免されたが、

B 4 20×20

そんなこんなで生家にも帰りそびれ、京の郡五係辺りの佛師に頼り徒弟となったのだ。彦根の生家が鎧造師として知られて居た故もあってか、腕の筋も悪くなしその佛師に可愛がられたと云う。

元来、鎧造師と云う者は実に複雑な仕事であって木竹、金工、それに漆工染工皮革細工までも兼ねて居る。粗材を削ること、木彫すること、彫金や鍛造すること、漆塗と金銀箔の扱い、細ひもの染めや革なめしを含めた総合製作であり、今の日展工芸部のガラスと陶磁を除いた全部と思って差支えない。これを一家で造るのだから、その技巧万能たるを要する。佛師の弟子となったのは賢明な道を選んだとも云える。

時勢の差今日ではとても想像がつくまいが祖父の幼時、伊井家の治下彦根の街に隨分滑稽な話もあった様だ。祖父の家には藤原香郷の後裔と称して、系図やそれを証する品々を蔵して居たと云う。或る時、何の故あってか『この街に香郷の家系がある筈だ』と藩の士が家々を取

調べて廻って来た。

これを知った当主は、さては何かの掛かり合いになるのは愚かと家人に命じて襲蔵のそれらのものを一切焼却させたと云う事だ。

全く子供だましの笑話に等しい位だが、封建治下然も無学の町人としては、或いは案外真剣に考へての処置であったのかも知れない。

また士が尋ね廻ったと云うのも、何かに利用しようとの下心があったことやらさっぱり判らぬ。

兎に角、こうした時勢に育ち家を継ぐ兄もあったとすれば、この風来坊は思うが儘京の佛師の家で腕を磨いたらしいが、長くは腰も落ちつけず、やはり風来坊の本性を発揮して各地を転々し鳥取までやって来た。

そして丸山の某庵に足を止め庵主の嘱で仕事を始めたが相当の腕だったので親切な庵主はこの無筆な青年佛師のために、寺小屋に学び相当字を知る近所の娘を配するまでの力の入れ方である。

僕も祖母さまの筆蹟を見知って居るが、御家流で仲々の達筆と思った。

放浪の青年佛師は相当酒を親しんだ様だけれ共、妻を得て始め

うめの
明治9年10月12日生

No. 4

て落付きを得たのか鳥取の地を離れなかった。そして、孫の僕が生れた年、五十六年の生涯を終ゑた。

明治三十一年である。

この祖父に特技が一つある。余程視力の強かった人と思ゑるのは、籾穀を半分に割り、米粒の代りに木を嵌入し、これに恵比寿、大黒の像を彫ったと云うのだ。

近年まで丸山の米澤嘉喜男氏がその一つを所蔵して居ると申されたが、遂に私は実見する機会を得なかった。

世に米粒に文字を書き並べる、所謂、細字家は往々あるが細彫は数少ないものと思う。

六月十二日

父の熊蔵は明治四年生れ、大正七年四月数え年四十八才で早逝したが、この父も世の常の人とは大いに変っていた様だ。

幼より祖父について彫刻の技を教はった様で、僕の二才の頃の作品として鳥取県若桜町西方寺の本堂宮殿が現存するが三十そこそこの青年の作として、誰人も驚異する程のものである。

僕の父に就いての記憶は明治三十七年後半頃のことに始まる。

当時日露大戦中であり、ラジオの無いその

B 4 20×20

頃だ。

毎日何回となく戦況を伝える新聞号外の鈴の音を今も忘れない。

特に明治三十八年一月一日、旅順の陥落のことを伝えられた時（多分二日の夜半）誰もが寒中の街路に飛び出して近隣の人達と喜びあった。

当時としては、国の興亡を決する大事として全国民が待ちに待った報であったことを、少年の頭にも浸み込んで居たので家人に従いて飛び出したのであった。

こゝで先づ父の性格のことを語らねばならない。

家業の彫刻には研究心深くその技柄も上述の如く相当のものであった様だが、若年より多趣味であったと思われる。

俳句、囲碁を楽しむ一方、柔の術をも修得し中極意とかの許しを得たと云う。

後、宗教に眼を向けたようだ。

はじめ神道を、次いで佛教特に浄土真宗を深く信じ歿年までそれを通した。

白らが信仰するのみならず、常に青少年の指導することを、天職の如くに考え、晩年には家業を外にすることを多く母をして嘆ぜしむることも少くなかった。

真宗説教所の中に佛教少年会や佛教青年会を

（ニタトウ）

組織し、少年会は日曜午前、青年会は土曜の夜、集会し講話した。丁度、今日の教会のやり方に似ているが全く街の人で終始し専門宗教家とは、つきり区別されることに誇りを持っていた。

後年、少年会の方は他の適当な有志の方に担当して貰った。時には講師として地方の会合より招かれることがあっても、主催者側のことを顧慮して成るべく自転車を利用したし、菓子折一つの謝礼をも断じてこれを受けなかったのは、時勢の異いとは云え極めて潔癖の人であったのである。

佛教青年会には、良き協力者を得て居たことは、又も仕合せであった。三、四のスタッフと共に相当な活動を続けて行った。

先に書いた日露戦争起るや挙国的献金運動が行われた。これは先の大平洋戦争にも、軍部の政策により可成強請されたのを私は経験したが日露の頃は国民全体的に必死真剣の至情より発せられた様に私には思われる。佛教青年会長としての父は、県知事の認可を得たる上、会員二十数名と共に長期に亘り毎夜鳥取市内

を街頭遊説しつゝ廃品を集めて廻り、国に献じた。

廃品廻収のことは、これ亦先の大戦にも隣組活動として行われたが、同じ方法を五十年前既に実行したのは注目に値する。

当時六才の私は父のこの街頭遊説の姿が眼底に残って居る。

その頃の世情は、いわゆる不況の一語につきる。

だから田舎の都市で彫刻の仕事等、てんで依頼を得られなかった様だ。

そこで、青年会の仕事を一時他の会員達に托し、母や祖母等を家に残し単身大阪に出向いたのが三十七年十一月頃と思う。

ってを求めて美術商山中商会に入ったのだ。

当時は山中の全盛期で彫刻や工芸の作品を盛んに米国に輸出して居たのである。

その工房には全国から彫刻家のみ四十名位集まって居り、その他工芸人も多数の中に飛び込んだ訳である。

初めは田舎者と軽蔑されたが、たちまちにして手腕を認められて一年後には頭角を表わして四十余名の彫刻人の中で三位の席に置かれるに至った。

性来の熱心さ、昼は彫刻、夜は絵画と大張り切であった

様だ。

丁度その頃東京の青山御所の建築中であり、その装飾彫刻の為に招かれる話が起った。これを知った「山中」では極力これを阻止した。工房より離したくなかった故である。父も東京行きは断念したが暫時にして大阪に居るのが嫌になり郷里鳥取に帰って来た。父は後年遂に東京の土を踏まずに世を終ったのである。

大阪出向は父の彫刻道には大いなる一劃であった。帰郷後も毎月中央の美術誌を鳥取の書店を通して取寄せて居た。新しいドリルや鋸の機械（米国製）を東京からのカタログによって買入れたりしたが、依然として家の経済に就いては欠格者であった。この点実によく私が継承して居る。

こうした中で彫刻の上に二つの特記すべきことがある。一つは時の皇太子（大正天皇）の御買上と、摩尼寺の佛具の連作である。

明治四十年四月東宮山陰地方巡幸のことがあり、宿所として久松山下に仁風閣が建築されたが、その一室に地方特産の品を陳列し、御覧に供した。父は置物二、額面一、計三点出品して

それに加わったのである。けれ共、幸にもその三点全部が買上げられたのである。出品全部の御買上げ世に類なく父はその光栄を非常に感激した。余程嬉しかったと見えて祖先の墓前にこれを報告したり、赤飯を知人に配ったりした。今一つは、明治四十五年五月摩尼寺に善光寺分身を迎えての如来堂建立に際してその仏具の総てを引き受けたことだ。大額面を始め内陣の仏具の大部分を成し遂げたのだ。住職伊藤廣成師とは常に肝膿相照した仲であり、彫刻のことの外、仏教上のことでも大いに交りを深めるところあり寺内で度々講話もしたのであった。この摩尼寺の仕事の連作には、一年半位を費したと思う。(僕もこの頃から刀を揮る術を覚えて居たので大分これに加わって居るのである)が父も余程苦心努力したし、後年まで快心に思った様である。

この頃は家族九人門下生三人外通勤工人三、四人で相当大世帯であった。

一方多面的な性格は再び仏教青年会の活動

(ニヅトウ)

の外、鳥取市連合青年会や落穂社と云う宗教教育、実業界等の知識層の社交団体に関係し、祖父や私と違って酒は一滴も入れられないにも係らず知友が甚だ多く和かに交った。こんな関係にあったので政界人に加わることを幾度も勧められたら遂に政党には関係せず、社会事業に尽すことを身上としたが大衆の前で長広舌する際も持前の大声を以てよく徹底させることが出来た。

大正五年、秋頃より常々誇った健康体に弱りを見せ始めて来た。大正七年一月、意を決して京都大学病院に出かけ診察を受けたが胃癌であったのである。僕もこの京都行きには付添うたが都合で一足先に帰宅した。二週間入院診療を受けた後帰郷の父は一層の弱りを見せた。爾来家人は素より友人知己多数の好意ある療法を試みたが遂に得るところなくして四月十二日遂に多彩な一生を封じた。

今、父の一生を振返ってみると、全程偉い人であったと私には思われる。

終生、金銭に縁遠き

B 4 20×20

こと甚だしく、この点では家族に思実とは云えない。（これまた私に同じうらみがある。）これと云う学歴はなくとも和漢の書には通じたし、特に佛道に関しては博識で強気でもあった。筆蹟は好ましくなかったがその意を他に伝えるに足る文章に達し居たし、更に壇上に重々警世の弁を振うに至ってはよく人をして感動せしめた。彫刻道に就いても田舎の少都市に在りて不充分なる資料により乍ら研究することに怠りなかったこと等、到底私共の為さんとして遠く為し得ざる業であった。

父の歿後、八人の遺族は（母と祖母、私の二十才を頭として六子）残された相当多額の負債を前にして途方にくれたが、多くの人々の同情によりその大部分は理解ある処置が行われ香奠として消された。然しそうもならぬものが大分あったので、長男の私が引受ける外なかった。

勇を鼓した私は無茶苦茶に働いた。三回忌の法要を迎える頃までは全く夢中で通して了った。僕許りではなく、母も弟妹も年少乍ら真

（ニアトウ）

剣であった。幸い直ぐの妹は良縁を得て神戸の向井氏に嫁したけれ共他は皆在学中だ。全く苦学状態であり乍ら何れも優秀な学業成績で世人を不思議がらせたのです。大正九年四月私は討らずも下田勘次氏の知遇を得て家族の生活費を三ヶ年間見てあげるから上京して彫刻道偏へに修業せよ(但し自力苦学だ甘くない條件がうれしいとまことに好意ある申出を得て夢かと勇躍した。これからが私の彫塑家生活への踏出しであり、彫刻家三代の苦行録に

もなるのです。朝倉文夫先生に師事した。

ここで一つ母のことにふれて見る。母は隣県の岡山県大原町の産、梅野と云う安東氏の出である。大原町の安東氏は新免氏、本位田氏と同家系である。先年、吉川英治氏作の「宮本武蔵」が世人の大いなる注目を浴び出したころの事である。全族の新免氏(私には従兄)で現在大府下に在る(の息子が類の少ない新免の性がたまいわい騒ぎ出した。

〈「武蔵」の家名と同じことより、学友の間でわ

これが機縁で岡山県大原

(ニットウ)

町の実家でも大いに関心を持ち壇那寺の過去帳を詳細に調査したのだ。その結果、新免家の祖は「宮本武蔵」の父、新免無二斉の兄の家に当って居ることを、初めて知ったのである。吉川代作「武蔵」のおかげであると云って居る。吉川代は「武蔵」の執筆に先立って美作の武蔵生地附近に永く滞在して、史実、言語、地理等入念なる調査を経た上でのあの大作が生れた由でこの吉川代滞在とても余程後日に至って土地の人は知ったのである。

一度この新免の子供が学友にさわがれた二年程後のことである。

私は同郷出身の新潮社名編集長と云われた故中村武羅夫氏、野村愛正氏、大江賢次氏その他重人、音楽家等と講演、音楽美術の会を催すために打ち揃って郷里に向かったことがある。その車中のにぎやかなこと、長途の旅も寝台に横たわった時間の外は、全く大はしゃぎであったが、その時突然、大江氏が長谷川君は「佐々木小次郎」的だと云いだしたので、それは違う、僕は「宮本武蔵」であると連座に答えた。そして母の出身

(ニヤトウ)

関係のことを話したのである。

実際、僕に佐々木小次郎的なものが少しあったらもっと面白い人間になったかとも思うが、よし悪しは別として何万分の一かの「武蔵的」なものが潜在していることを私はよく承知して居る。

剣に徹した「武蔵」が絵画に造庭にも達人の境にあったが、唯々懸命に彫塑の一道を歩んで来た私、未だに何を体得したりとも語り得ざるを恥じるものである。

農家出の母は、父の許に嫁した後、父の作った郷土玩具（獅子頭、竹馬等）の彩色を手伝うこともあったが、仲々埒ぬけた腕前を見せて居たのは面白いことではあるまいか。

僕が単調な彫塑一図の生活に対して弟妹は全々対しよ的であることも一言を要する。

妹清子（駒井玲子・後浅沼氏に嫁す）は大正末期に於て日本最初とも云うべきマネキンになって大活躍したし、又文筆にもいささか達して居た。

次妹寿子は（山田氏に嫁す）今は群馬の農村に在るが初期日共の組織部長、青年部長等にもな

（ニ ツ ヅ キ）

って苦難の道を経たが、後転伺して山田に嫁し満州南拓団に加わり渡満数年を過した。戦後夫の郷里群馬に帰り、農事をやって居るが強い性格の持主であり、弟二人は工学を修めた。電気熔接、航空機工業、(後自動車工業)で相当の地位に在るが、美術と縁遠き道にあり乍ら共に絵画も親しむことも面白い。

＊この原稿が書かれたのは昭和三十年頃で、塊記氏の没年は昭和四十八年四月十六日です。

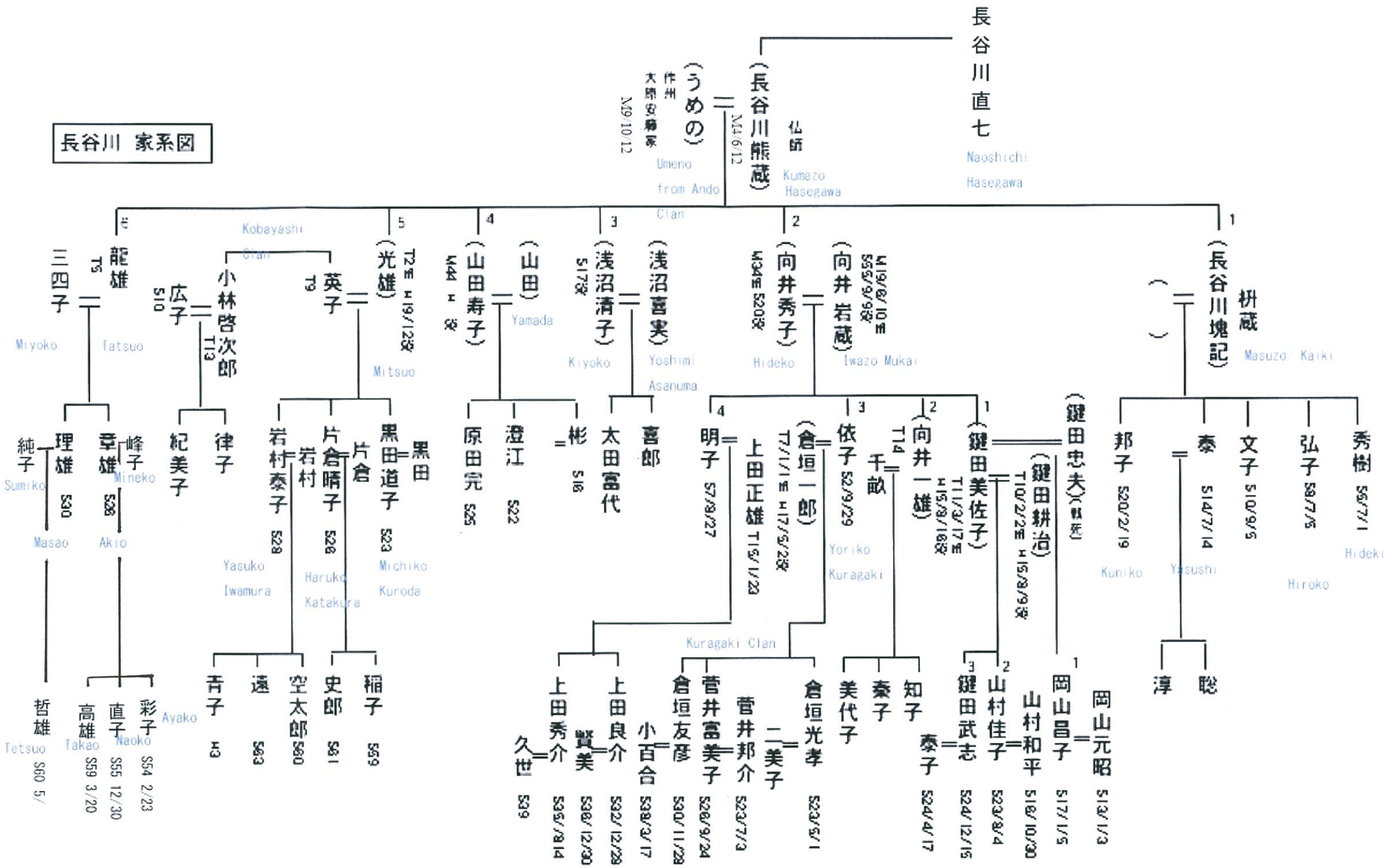
著者　長谷川塊記
編者　長谷川弘子

長谷川蔵書

複写　昭和五十八年三月十四日

(ニットウ)

長谷川 家系図


長谷川直七
Naoshichi Hasegawa
(長谷川熊蔵) 仏師
Kumazo Hasegawa
(うめの) 作州 大原安藤家 M9/10/12
Umeno from Ando Clan
M14/6/12
1 (長谷川塊記) 耕蔵
Masuzo Kaiki
(　)
邦子 S20/2/19 Kuniko
泰 S14/7/14 Yasushi
淳
聡
文子 S10/9/5
弘子 S8/7/5 Hiroko
秀樹 S6/7/1 Hideki
2 (向井岩蔵) M19/8/10生 S55/9/9没 Iwazo Mukai
(向井秀子) M34生 S20没 Hideko
(鍵田忠夫)(戦死) T10/2/2生 H15/8/9没
(鍵田耕治)
(鍵田美佐子) T11/3/17生 H15/8/18没
1 岡山元昭 S13/1/3
岡山昌子 S17/1/5
2 山村和平 S16/10/30
山村佳子 S23/8/4
3 鍵田武志 S24/12/15
泰子 S24/4/17
(向井一雄) T14
千畝
知子
秦子
美代子
3 依子 S2/9/29 Yoriko Kuragaki
(倉垣一郎) T7/1/1生 H17/5/28没
倉垣光孝 S23/5/1
二美子
菅井邦介 S23/7/3
菅井富美子 S26/9/24
倉垣友彦 S30/11/28
小百合 S38/3/17
4 明子 S7/8/27
上田正雄 T15/1/23
上田良介 S32/12/28
賢美 S36/12/30
上田秀介 S35/8/14
久世 S39
3 (浅沼清子) S17没 Kiyoko
(浅沼喜実) Yoshimi Asanuma
喜郎
太田富代
4 (山田寿子) M44生 S6没
(山田) Yamada
彬 S16
澄江 S22
原田完 S25
5 (光雄) T2生 H19/1没 Mitsuo
黒田道子 S23 Michiko Kuroda
黒田
片倉晴子 S28 Haruko Katakura
片倉
岩村泰子 S28 Yasuko Iwamura
岩村
稲子 S59
史郎 S61
空太郎 S60
遠 S63
青子 H3
Kobayashi Clan
英子 T9
小林啓次郎 T13
広子 S10
紀美子
律子
6 龍雄 T5
三四子 Miyoko
Tatsuo
理雄 S30
純子 Sumiko
Masao
哲雄 S60 5/ Tetsuo
章雄 S36 Akio
峰子 Mineko
彩子 S54 2/23 Ayako
直子 S55 12/30 Naoko
高雄 S59 3/20 Takao